



令和8年6月26日
日立市教育員会郷土博物館

収蔵美術品展「絵空事のラビリンス—白昼夢へつづく『絵画』という扉—」 のご案内

この度当館では、標記展覧会を下記のとおり開催することになりました。
つきましては、展覧会の取材及び記事掲載についてご配慮くださるようお願いいたします。

記

1 開催期間

令和8年7月18日（土）～9月6日（日）

※毎週月曜休館（ただし、7月20日（月・祝）は開館、翌21日（火）休館）

2 開催場所

日立市郷土博物館 2階特別展示室（日立市宮田町5-2-22）

3 内容

郷土博物館の近年の新収蔵品を中心に、幻想と現実のあいだで様々な独創的な表情をみせる作品群を展示します。

4 観覧料 無料

5 添付資料

- (1) 展覧会チラシ
- (2) 展覧会概要

以上

【問合せ】日立市教育委員会郷土博物館（担当 ろくど 六渡[広報]、大森[展示]）

TEL 0294-23-3231

収蔵美術品展

絵空事のラビリンス

白昼夢へつづく
「絵画」という扉



上田薫

《スプーンのジャム》

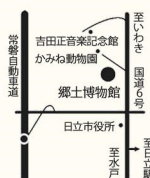
1978年（昭和53）油彩・キャンバス 当館蔵

2026年7月18日 [土]
— 9月6日 [日]

開館時間：9時30分—16時30分 [入館は16時まで]

休館日：月曜日（7月20日[月・祝]は開館し、翌日休館）

観覧無料



かみね公園入口
日立市郷土博物館

〒317-0055 茨城県日立市宮田町5-2-22
TEL.0294-23-3231 FAX.0294-23-3230

収蔵美術品展「絵空事のラビリンス—白昼夢へ続く絵画という扉—」

【開催概要】

私たちが絵画を観るとき、そこに「現実(リアル)」を見いだそうとすることがしばしばではないでしょうか。しかし三次元の世界を二次元に描いた時点で絵画は、現実を離れた「虚構=絵空事」の装置とも言えます。本展では、日立市郷土博物館の新収蔵品を中心に、現実と幻想のあいだに出現する独創的な作品群を「絵空事のラビリンス(迷宮)」に見立ててご紹介します。

会期	7月18日(土)～9月6日(日)	開館時間	午前9時30分～午後4時30分
会場	日立市郷土博物館 2階特別展示室		
休館日	毎週月曜日(ただし7月20日[月・祝]は開館、翌7月21日[火]休館)		
観覧料	無料		

【展示構成】

第1章 日常のなかの違和感 ——「現(うつつ)」に潜む影

ここではまず絵画の「虚構性」に焦点をあてます。写真と見紛う超絶な写実で知られる上田薫の作品では、日常的でありながら実際には正確に見ることのできない(あるいは見ていない)流動的な一瞬が大画面に拡大された、いわば作り上げられたリアルなのです。ここは日常風景=「現(うつつ)」に潜む奇妙な静けさや違和感、人間の視覚と認識の曖昧さなどを再認識する、迷宮の入り口です。

[出品作] 上田薫 《スプーンのジャム》 《ジェリーにナイフ(C)》、石井武夫 《小さな庭》、
佃彰一郎 《おのぞみの未来》ほか

第2章 変容する写実——「絵空事」から「白昼夢」へ

描かれたイメージが、現実から遊離した「絵空事」であることを起点に、さらに幻惑の白昼夢へと突入していく表現を紹介します。十河雅典による謎めいた生命体や解読不能な文字・記号、商標名などが混然となって織りなされる不可思議な絵画は、どこか不穏で神秘的な世界を出現させ、写実とは趣を異にする現代生活のリアリティを照らし出します。

[出品作] 十河雅典 《夢》《惑星通信》《動物図譜—カルピスの場合—》《ナットウマン》ほか

第3章 無意識のポエジー ——キャンバスという名の扉、あるいは鏡

絵画を現実の模写ではない「画家の内なる意識・無意識を現出させる装置」と仮定し、具象から抽象まで幅広い作品を展覧します。無意識と記憶の断片に接続された生命力をみせる奥山民枝、深層心理がにじむ超克的な肖像を描く福地靖、労働的テーマに普遍性を与える広原長七郎、叙情的な記憶の風景を想起させる西成田育男など、それぞれの画家の資質が反映された詩情(ポエジー)が通底します。世界とつながる「扉」であり内面を映す「鏡」でもある絵画が、「正解」のない問いへと誘います。

[出品作] 奥山民枝 《忘れ日》、福地靖 《無題》《肖》《肖[日月]》、広原長七郎 《蹄鉄屋》、
西成田育男 《架景/解夏 190815》ほか

以上